

「越水で壊れぬ堤防を」

台風19号による河川の堤防の決壊は、川の水があふれる「越水」で住宅地側が削られたことが原因となったケースが少なくない。一方、複数の旧建設省（現国土交通省）OBは、国が過去に中止していた、越水に耐え得る安価な堤防強化策の再導入を訴えている。



末次忠司教授

「川の水があふれただけだったら、これまでひどくならなかった」。茨城県常陸大宮市野口的那珂川流域。浸水した自宅の清掃をしていた会社役員皆川雅明さん（左）が声を落とす。

（小倉貞俊） 〇面参照

十月十三日未明、堤防が長さ二百メートルにわたり決壊。

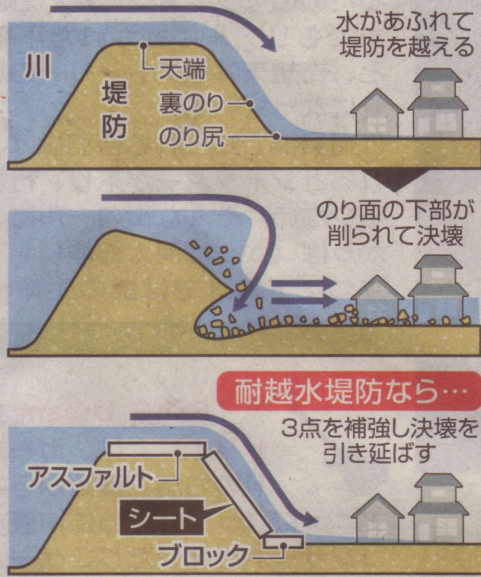
五十軒近くの民家や畑、ビニールハウスが水に漬かった。堤防から四百メートル離れた皆川さん宅も床上二メートルまで浸水。テレビや洗濯機、冷蔵庫などは廃棄処分になった。

「水だけならすぐに引いたはず。決壊で大量に押し寄せた水が泥と一緒に押し寄せた」と嘆いた。

積もってしまった」と嘆いた。

かさ上げなしでも「安価に補強」

越水による決壊のイメージ



耐越水堤防なら…

3点を補強し決壊を引き延ばす

天端裏のり尻
アスファルト
シート
ブロック

専門家導入提唱「避難時間稼ぎに有効」



「この水位まで泥水に漬かりました」と自宅外壁を指し示す皆川雅明さん。市からは「大規模損壊」の判定を受けた＝茨城県常陸大宮市野口で

国や各県はそれぞれが管理する堤防の決壊原因を調査しているが、この堤防や、大規模な氾濫が起きた千曲川（長野市穂保）の堤防など、越水が原因とみられるケースは少なくない。

こうした被害に「耐越水堤防の整備が急務だ」と指摘するのは、旧建設省土木研究所河川研究室長を務めた末次忠司・山梨大学大学院教授だ。浸食を防ぐため、堤防の裏のり（住宅地側のり面）をシートで保護

し、天端（堤防の上面）と

訓に、五年計画の堤防強化に着手。堤防のかさ上げができない箇所は、天端、のり尻の二点の補強を進めている。

同省によると、那珂川水系の堤防整備率は38%と、全国平均（68%）を大きく下回り、常陸大宮市野口の堤防は、河川整備計画より高さが二・三メートル不足。越水の可能性は認知されており、今後の工事対象になっていた。

ただ末次氏は「二点だけでは逆に斜面がもろくなり不十分。裏のりの保護が必要だ」と強調。「台風が大変化しているからこそ、越水を前提に対策しなければ。時間も稼ぎ避難を確実にする効果がある」と話す。

旧建設省土木研究所次長だった石崎勝義・元長崎大教授も、昨夏の西日本豪雨で天端とのり尻の二点を補強した小田川（岡山県）の堤防が決壊した事例を挙げ、「バケツに三つ開いた穴の二つしかふさがらないようなもの」と批判。「官僚の文化として一度中止した政策を復活させづらいのだろうが、ダムやスローパー堤防を後回しにし、事業費をまず耐越水化に充てるべきだ」と警鐘を鳴らしている。